

令和7年度 園評価書

園番号 31 園名 飯田北こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取り組み目標等)
心身ともに 健やかな子	“やりたい”が もつつながる	様々な方法で自分の思いや考えを伝えたり、相手の話を聞いたりする	保育者が子どもの思いに共感したり、受け止めたりしたことで、自分の思いを言葉や表情、言葉で表現する姿が増えた。中にはまだ自分の主張が優先しがちになり、相手の気持ちを理解したり話を聞かせることが難しい子どももいるが、保育者の仲立ちにより相手の言葉にも耳を傾けようとする姿が多く見られるようになってきている	A	A	・挑戦とあるが、あきらめが早い子もいる。こども園で友達に触れられるのが良い所。子どもが楽しみに登園して、保育を工夫していることがわかる。家でやらないことをしてくれるのがありがたい	自分の思いを聞いてもらえる、受け止められるという経験を積み重ねられるような関わりを引き続き保育者が意識していく。また、子どもの状況に応じた関わりや相手に対する伝え方を保育者も一緒に考える等、繰り返し援助していく
		保育者や友達と一緒に遊ぶ中で、繰り返し楽しんだり挑戦したりする	保育者が繰り返し遊べる環境・遊びを楽しむ環境・興味関心に合ったコーナー作りや教材等を工夫したことで、試行錯誤したり、挑戦する姿が増えた。繰り返し遊ぶ中で遊びの面白さに気付く。次はこうしよう」と遊びのつながりが見られた。遊びの楽しさを感じる前に諦めた。出来ないと感じるも遊びをやめたりする姿も少し見られるが、保育者が一緒に遊ぶ事で挑戦する姿が増えていく	A	A	・“やりたい”がもつつながるように保育者が声掛けを工夫したり、環境を整えたりしていることが参観時に見て取れた。「繰り返す」「続きを楽しむ」「諦めない」ための子どもの内面の理解と準備や援助の工夫を積み重ねていることも分かった	・保育者も一緒に遊ぶ中で子ども一人一人の内面を理解し、発達や経験、興味関心に合わせてモジュールステップを意識した援助や環境の工夫を継続していく ・準備や援助を過ぎず、失敗を葛藤経験と捉え、試行錯誤できる環境、援助を考えていく
		子どもの“やりたい”思いを受け止め、見通しをもって遊びを計画、実施する	クラス会議、学年会議等で見通しをもち、計画的に遊びの環境を整えてきた。また、子どもと一緒に遊ぶ中で、遊びの何を楽しんでいるのか、子どもの今の姿を捉え、興味関心を探ることで、子どもの「やりたい」がう環境構成を行うことができている	A	A		会議だけでなく、自ら発信・相談したり、保育を語る時間を意識的に作っていく。子どもの発達を学び、クラス、学年、園全体で話し合い、共有し、長期的な見通しをもって環境を考え、実現させていく

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取り組み目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	幼児期の終わりまでに育ててほしい姿の理解を深め、より適切な援助につなげていく	園内研修や日誌の中で10の姿に照らし合わせ、子どもの育ちを捉えようとする意識が広がってきている。10の姿を基盤に、職員間で個々の発達や姿を共有し相談しながら手立てに繋げている。しかし、10の姿を各児児の発達に合わせて考え、援助につなげるための理解がまだ不十分である	B	B	・「10の姿」など目指す姿をもつことは、情報共有の必要性を高めたり、情報を精査したりすることにつながり組織的な教育保育の力を高めると考える。目指す姿への道筋や到達度は、子ども、保育者や保護者の教育力、取り巻く環境により違ふことを念頭に置き、情報をどう生かし、支援していくか方法に答えはない。保育者が10の姿や情報共有を意識し、目の前の子どもを大切に教育保育を考える体制を維持することが大切だと考える	月案の反省の書き込み10の姿を取り込むなどして、職員間で実際の子どもを照らし合わせ、10の姿への理解を深めていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の家庭環境を理解し、その子に合った援助や保護者支援方法を職員間で共有し関わる	会議に出られなかった職員にも伝達する場が設けられた。勤務時間によっては関わる機会が少なく、様子把握しにくいこともあるが、子どもの情報を共有し、援助につなげていく	A	A	・保護者アンケートからも保護者の評価はよく、子どもの様子は日々違うが、年齢に合わせた援助ができていると思う。伝達の難しさはあるが、うまくいければ良い	写真や動画なども使用し、子どもの様子を職員で共通理解、対応できるようにしていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	その日の遊びの振り返りから、翌日の遊び出しの環境を整える	日々子ども達と遊びの振り返り、担任間での振り返りを行い、短、中期的な見通しをもちながら「つながる」を意識した翌日の教育保育の展開や環境構成に取り組んできた。今後も継続して行っていく中で振り返りをクラス間だけでなく、常時園全体への共有、発信ができると良い	A	A	・職員増員できると良い。工夫だけでは難しい所もあるのではないかと ・長期的な見通しは、短、中期的な取り組みをどうつないでいくかという組み合わせなのではないか。“やりたい”をつなげようという取り組みであることは長期的な取り組みを意識した経営の中にあると感じた	発達や遊びのねらいを意識して引き続き中・長期的なプロセスを考え、翌日の計画、環境作りを行う。若手職員にも教育保育や発達の見通しをもてるよう、遊びの様子を共有し、保育者間でサポートし合い、実践していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	災害時に予想される被害状況を明確にしたり、危険の少ない場所を理解したりしながら訓練を実施する	毎月の訓練や減災教育を通して、園の立地を考慮した災害想定をもとに訓練を行ったり、危険箇所を子どもと一緒に考えたりすることで、子どもも職員も危険の少ない場所を身を守る意識が高まっている。しかし、被害状況の予測や判断がまだ不十分であり、危機感や意識の差が見られる	B	B	・忙しい中研修し、子どもが日々楽しめる工夫がされている。玄関の花や野菜の栽培では、花が咲き、実になり食すことや、天気左右されることがわかることができる。ズッキーニ栽培は面白い。学風保育でおみくじをやっているが、季節を取り入れると良い	・訓練をタイムリーに振り返り、反省点を次回に活かす体制作り。様々な災害想定を考えた年間計画の立案に多くの職員が関わり、意識を高めていく ・セキヤックハット、ケガ報告は随時報告の徹底、不審者訓練の実施内容についても強化し、意識を高めていく
3 健康管理・指導	(1)健康教育の充実	子どもが「よく噛んで食べる」方法が分かり、意識して取り組む	「かみかみメニュー」や栄養士、保育者の声かけを通して、子ども達が「よく噛んで食べる」ことを意識し日常の食事場面でその姿が見られるようになってきた。姿勢やマナー指導に意識が向く場面もあり、子ども自身の習慣として定着するまでは丁寧な関わりが今後も必要であるが、噛むことへの理解は進んでいる	A	A	・避難訓練については、頑張っている。どれだけ子どもが避難について認識するかが大切。防災について言われている割には全体的に認識が低いので、子どもから保護者へ、さらに地域へと広がっていくと良い。意味のある訓練をしてほしい	今後も栄養士や調理員と連携し、これまでの取り組み（献立表や食育だより、給食見本の掲、子ども達への食事指導）を家庭とも共有しながら進めることの楽しさ、「よく噛むこと」の大切さを長期的に伝えていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	支援を必要とする子どもに対して、支援方法を共有し、同じ手立てで関わる	情報共有されているものの、実際に関わる場面が少ない職員にはイメージしにくい部分もあるが、加配会議や日誌を通した情報共有により支援児の特性や関わり方への理解が深まり、日常の保育の中で意識した関わりが加配担当職員以外にも広がってきている	A	A	・危機管理は訓練の積み重ね。通常時にできないことは非常時にはできない。継続が必要である	日誌を通して日々の関わりを振り返る。支援の意図や関わり方を加配担当職員に相談したり、全職員で確認、共有し、同じ視点で支援が行えるよう継続して取り組んでいく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	分掌と各クラス担任が連携し、様々な活動内容を計画し実施する	会議報告、伝達が不十分なものもあったが、大きな行事では話し合いの場を設け、見直しをもって計画し、会議を通して共有することが以前よりできている	A	A	・よく噛んで食べることについては保護者にもっと浸透すると良い。伝えていくことが大切だと思う ・日々の配信は、写真があることで見てわかり、楽しみになっている。小学校でも写真が配信され、リアルタイムで様子が届く。アンケートもQRコードからになっている	企画書は配布だけでなく、直近のものは事務室に掲示するなどして全体で共有できるようにする（乳児、幼児で共有できるように話し合いの場を確保し、会議報告の体制を作る）
6 研修	(1)研修体制の充実	園内研修で積極的に発言し合い、得た学びを自身の教育保育にどう活かしたか明確にする	少人数で話し合うことで、全員が発言するようになってきた。公開保育における学びを活かした実践を記録し、クラスで共有することで学びをつなげることを意識できた。研修方法について話し合いを重ね、改善してきたが、分析したり、研修の視点を焦点化することに難しさもあった	B	B	・保育者の話で一日の様子が分かり、楽しみにしている ・近隣園との連携は、公立園は人事異動があるので、異動者に前園でのことを聞き、取り入れることで知ることができると話すのが良い	研修方法や視点については年度当初に全体で話し合い、共有、改善をしていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	園内外の生活動線において、様々な経験ができるような環境をつくる	中間評価の反省より、担当を決め、季節ごとに環境を変化させることで、玄関等が季節を感じたり楽しんだりすることができる環境作りができた。担当が明確でないことから、生活動線をどのように活用するか、準備していくか等話し合いの場もできていなかった。また、園外の環境づくりが難しく、目を向けにくかった	B	B	・学校間や地域との連携では交流を繰り返し理解を進める必要がある。幼保小一貫教育等推進される中で果たすべき役割を意識していく ・地域資源では繋がりをもちことが大事。アンテナを高くし、地域を利用していき。利用したら、お礼をすることが大切。やりっぱなしにせず、コミュニケーションをとり、園も地域もお互いWIN-WINの関係になるようにしていくと良い。地域だよりはたまにいくらの発行が良い	・年間や時期、担当を明確にして一人一人が責任をもって行う ・話し合いの場を設け、職員間で意見やアイデアを出し合っていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	保護者が興味をもって読みたいくなるような工夫をし、コドモンで配信する	写真を取り入れ、子どもの姿や学びを配信することで、保護者にとってわかりやすい情報提供を行った。しかし、配信内容や視点にばらつきが見られるため、育ちや保育の意図が伝わるような書き方を統一していく必要がある	B	B	・前回よりもA評価が多くなり良い。遠慮しなくて良い。B評価は余力が残っていると受け止める	おたより研修を継続していく。他クラスの配信物を参考にし、伝えたいことを明確にした。よりよいドキュメンテーションや学びづくりを学んでいく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣園、近隣校の研修に参加し合い、学びを深める	多くの職員が近隣の公開保育や近隣校の公開授業研修に参加し合い、それを職員会議や報告書の園内で他の職員に伝えることで自身の学びをさらに深めることができている。しかし、実践につなげられるまで深まっていないこともあった	B	B		報告書は、写真や資料等を活用しながらより理解しやすい報告の仕方工夫することにより園全体の学びにつなげ、一人一人がその学びを自身の教育保育に活かそうとする意識をもつ
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	見直しをもって地域の資源を教育保育に取り入れ活かす	継続的にイモ掘り体験、地域だよりの発行、交流館での作品展示を行い、新たにレンジが畑で遊ばせてもらったり、節分前にはヒイラギをいただいたり地域の方と関わり、教育保育に取り入れた。地域を身近に感じられるよう、年度途中で各クラスに散歩マップを掲示した。今後さらに活用する意識をもつ必要がある	B	A		園内で地域の情報を定期的に共有し、職員が地域を知り、散歩マップを教育保育に活かしていく。またマップを利用し、子ども達に道のりを伝えたり、振り返りなどを行うことで地域の良さを知り、遊びの充実につなげる